

新言語学と英語教育¹⁾

付加疑問文と付加命令疑問文をめぐって

広島大学大学院 高 島 英 幸

0 はじめに

スプートニク打ち上げと同年代に端を發した変形生成文法のカプセルは、ここ20年の間に統語論から意味論へと移動しつつある。我々言語教育に、とりわけ、英語教育に携わっている者は、その事実をしっかりと把握し、言語の本質を問いながら、言語学(意味論)の成果から何らかの示唆が得られないものかと探究し、日々の授業の改善に努力していかねばならないように思われる。たとえば、生成文法理論の成果の中で、一見、同一と思われる2つの文が全く異なった基底構造(意味)をもつ文であることを明示し、その2つの文が異なっていることを理解する際の心的過程を提示してくれた深層、表層構造・変形概念の導入は、いわば、言語学のコペルニクスの反転と言ってもよく、英語教育においてもきわめて興味深い成果であるといえよう。

本稿では、この深層統語構造ないし意味構造概念が、英語教育における指導・教授法に何らかの示唆を与えてくれるのではないかという観点から、付加疑問文(tag questions)と付加命令疑問文(tag imperatives)における基底の意味構造を解明し、その指導法(ここでは、付加疑問文に限る)に考察の光を投げかけてみたい。このことによって、学習者に、より本質的な思考法と学習態度をひき起こすことができれば本望である。

従来の学校(特に中学校)における付加疑問文を指導する際の原則的な事項は、以下の点に要約されるであろう(稲村他編『中学校指導法事典<言語材料編>』1970 pp. 398-399 参照)。

- (i) 主文の主語が名詞の場合には、tagの主語は代名詞にする²⁾。
- (ii) 主文の主語が代名詞である場合には、これをくり返す。
- (iii) 助動詞は主文に用いられたものをくり返し、主文に一般動詞(*go, have* など)がある場合には、*do* または *does* を挿入する。

また、文の抑揚(intonation)に関しては、

- (iv) 上昇調(rising tone)ならば、話者が聞き手に自分の陳述の確認を求めていることを示す。
- (v) 下降調(falling tone)ならば、話者の陳述に対して、聞き手の同意を期待していることを示す。

のようにまとめることができ、

- (vi) 肯定文には否定の疑問文を
- (vii) 否定文には肯定の疑問文を付加するもの

が、付加疑問文であるという指導がなされているように思われる。

ここで、筆者は、従来のスクールグラマーの体系(付加疑問文)を根底から否定するのではなく、改善の余地があれば、それがどこにあるか探りあてたいわけであるが、上述のような指導法

では、主文（基底の文）から tag は無差別かつ機械的につくられることになりはしないだろうか。また、磁石の両極のごとく主文が肯定ならば tag は否定になり、主文が否定ならば tag が肯定になることの経験的根拠に基づいた説明もなされていないように思われる。そして、ひいては、付加疑問文の本質的な意味構造を把握しないままに（真の定着がなされていないままに）習慣形成のための練習に移行してしまっているのではないかとと思われるふしがある。

以下に、これらの点を踏まえながら、真の定着をめざした授業を求めて、議論を進めていきたい。

1. 付加疑問文と擬似付加疑問文

周知のように、付加疑問文には2つの型があり、それらは音調（抑揚）によりさらに2つに分かれると考えられている。ここでは、以下に述べる理由により、(1)～(5)を付加疑問文、(6)～(8)を擬似付加疑問文とし、後者を議論の対象からはずすことにする。次の例文を見られたい。

- (1) Ken is kind, $\left\{ \begin{array}{l} \text{(a) isn't he? } \nearrow \\ \text{(b) isn't he? } \searrow \end{array} \right.$
- (2) Ken isn't kind, $\left\{ \begin{array}{l} \text{(a) is he? } \nearrow \\ \text{(b) is he? } \searrow \end{array} \right.$
- (3) He lives in London now, $\left\{ \begin{array}{l} \text{(a) doesn't he? } \nearrow \\ \text{(b) doesn't he? } \searrow \end{array} \right.$
- (4) You don't understand, $\left\{ \begin{array}{l} \text{(a) do you? } \nearrow \\ \text{(b) do you? } \searrow \end{array} \right.$
- (5) One can hardly tell the difference, $\left\{ \begin{array}{l} \text{(a) can one? } \nearrow \\ \text{(b) can one? } \searrow \end{array} \right.$
- (6) Mary is ready. is she?
- (7) Mary is not ready. isn't she?
- (8) "Aye. He'll take the pennies off the eyes of the dead, but he's loyal to me."
"He is, is he?" (Peter Benchley. *The Deep*. New York: Bantam Books. 1976. p.207)

(1)～(5)の全ての文に共通していることは、肯定文には否定の疑問を、否定文には肯定の疑問を付加し、それぞれ音調の違いにより、

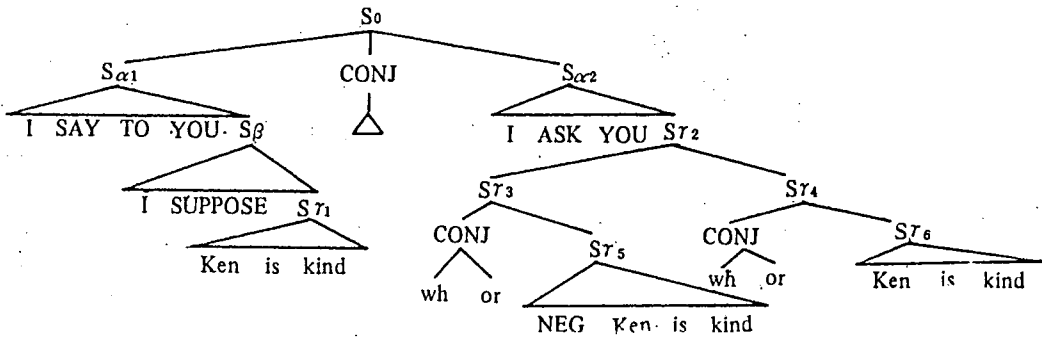
- (9) (a) 話者の述べた事に対して聞き手に確認を求める（ \nearrow の場合）
(b) 話者の述べた事に対して聞き手に同意を求める（ \searrow の場合）

に分かれるという点である。しかし、(9a)と(9b)との違いは、話者の発した命題に対する確信の度合いの違いに帰し、両者共、同一の深層構造から派生され得ると考えてさしつかえないであろう。一方、(6)～(8)の文は、それぞれ、肯定文には肯定の疑問を、否定文には否定の疑問を付加しており、普通は上昇調で発音されるが、驚き、皮肉の意味を含むときは下降調で用いられることがあるという特徴をもっている（井上 1966, 大塚編 1970参照）。この場合、主文は通常の付加疑問文とは違い、話し手の命題ではなく、相手の態度や相手が述べた事に対する自己の関心を表わす場合に用いられるので、付加疑問文とは似て非なるものをみなしておきたい

(Cattell 1973 : 615)³⁾。従って、本稿では、この擬似付加疑問文は扱わないことにする。

付加疑問文(1)の意味構造は次の(10)のごとく表すことができるであろう。また(10)から(1)への生成には、Tag Question Formation Transformation, Performative Deletion⁴⁾などが適用されるとしておきたい(鈴木 1972 : pp.15-23)。

(10)



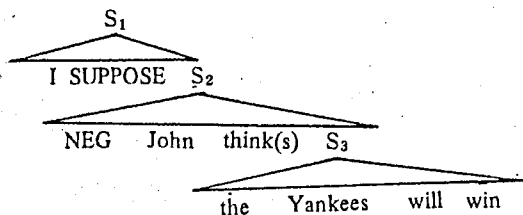
2. 話者の判断と聞き手への問い返し

2.1 R. Lakoff's Analysis

Lakoff (1969) は、(11)のような付加疑問文の基底には(12)のごとき意味構造が存在すると仮定している。つまり抽象的な performative verb "SUPPOSE"を仮定し、全ての付加疑問文は、"I SUPPOSE"という performative sentence に支配されていると考え、その performative sentence (S₁)に直接支配されている埋込文(S₂)が疑問化される、という主張である。換言するならば、付加疑問文は suppose の意味を持つ performative verb を含む節 (performative sentence) 'I SUPPOSE'を上位に持つと提案をしているのである。例文(11)の場合も、'I SUPPOSE'を文頭に冠して考えると(12)の構造が得られるであろう。

(11) John doesn't think the Yankees will win, does he?

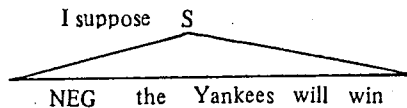
(12)



また、以下の例文(13)(14)では、抽象動詞 "SUPPOSE" が現実の動詞 "suppose"として現われ、否定辞 NEG(not)は、一見、"suppose"を否定しているかのごとく思われるが、performative verbという性格上、否定されることはなく、実は、'Negative Transportation'変形によりひとつ下の埋め込み文から転移されてきているとみなしている。従って、付加疑問文(14)

の tag には否定辞が入らないことの理由が明らかになるわけである。

- (13) *I don't suppose the Yankees will win, do I?
 (14) I don't suppose the Yankees will win, will they?
 (15)



このように考えれば、例文 (16)(17) において、tag が 'don't I?' とならない理由や、例文 (18) の非文法性が明示的に説明されたことになるわけである。

- (16) I suppose you think you're real smart, don't you?
 (17) I suppose John isn't here, s he?
 (18) *Bill supposes that Mary is here, sn't she?
 (19) Bill supposes that Mary is here, dosen't he?

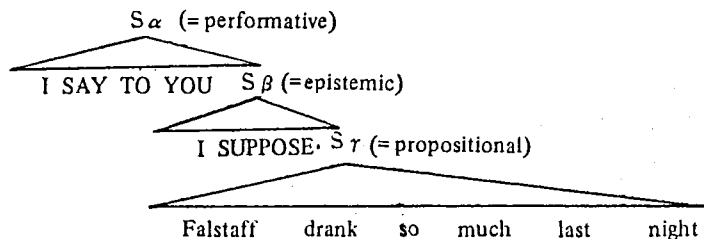
ここで注意したいことは、付加疑問文は必ずしも主文からのみつぐられないという重要な観察がなされたことである。

2.2 H. Sawada's Analysis

澤田 (1976) は "SUPPOSE" というような抽象動詞は、Lakoff の主張するところの話者の発言行為を示す遂行的動詞 (performative verb) ではなく、むしろ、話者の主観的判断を表わすものであると主張した。さらに、その話者の判断を示す動詞は、抽象的な発話動詞とある概念内容との間に介在する抽象的命題態度の動詞であるという見解を示した。すなわち、抽象動詞 "SUPPOSE" は performative verb ではなく、"epistemic verb" であると指摘したのである。この見解によれば、(20) の文は次の (21) の基底構造を有するとされるわけである。

(20) Falstaff will probably have drunk so much last night.

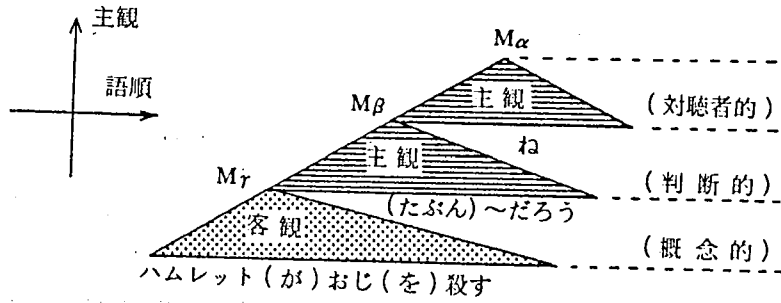
(21)



また、同じく澤田 (1976) では、文の「表現性」としての「主観」、 「客観」の対立が下図のような hierarchical order で表わされている。

- (22) (a) Probably, Hamlet will kill his uncle, won't he?
 (b) たぶん、ハムレットはおじを殺すだろうね。

(23)

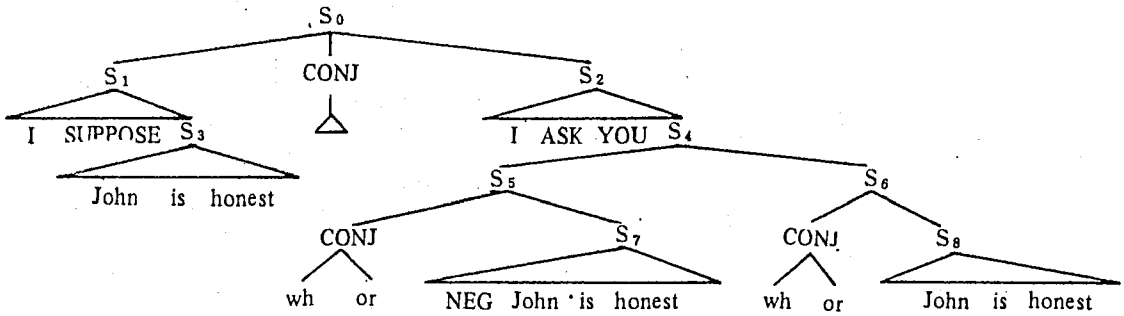


2.3 A Proposed Analysis

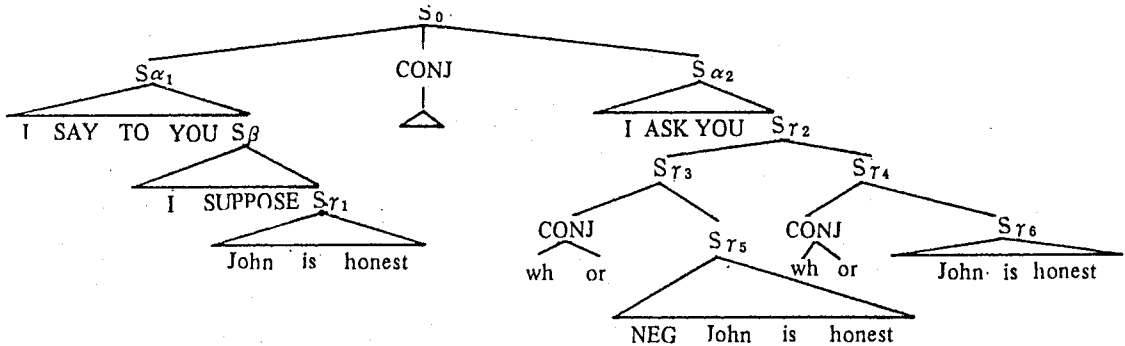
Lakoffおよび澤田に従うならば、鈴木(1972)における付加疑問文(24)の意味構造(25)は(26)として修正されなければならないであろう⁵⁾。

(24) John is honest, isn't he?

(25)



(26)



ここで明らかなことは、付加疑問文がその特徴としてもつ文の構造には

(27) (a) 話者の判断 (S_{β})と

(b) 聴者への問い返し (S_{α_2})

が含まれていることになり、付加疑問文が聴者指向的 (hearer-oriented) であるという認識的な基盤を有するということである。また、Lakoffは(26)で言う S_{β} からは付加疑問文がつかれないという提案をしたが、澤田の提案を考慮するならば、もう一つ重要な提案をしたことにな

る。つまり、付加疑問文は performative sentence からつくりだすことがわかるわけである。
次の例文と performative verbs のリストを参照されたい (Cattel 1973, 澤田 1976 参照)。

- (28)
$$*I \left\{ \begin{array}{l} \text{defy} \\ \text{challenge} \\ \text{order} \\ \text{request} \\ \text{command} \end{array} \right\} \text{you to say that again, 'don't I?}$$

(29) Performative verbs:

state, assert, comment, remark, describe, warn, approve, welcome, object, command, demand, criticize, etc.

これまで議論してきたことを例文 (30) を具体例として説明するならば、(31) のように bracketing できるのではないと思われる。

(30) John is kind, isn't he?

(31)
$$\left\{ \begin{array}{l} \text{私は} \\ S_{\alpha_1} \end{array} \left\{ \begin{array}{l} \text{私は} \\ S_{\beta} \end{array} \left(\begin{array}{l} \text{Johnが親切だ} \\ S_{r_1} \end{array} \right) \text{と思う} \right\} \text{とあなたに告げる} \right\}$$

のですが

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{私は} \\ S_{\alpha_2} \end{array} \left(\begin{array}{l} \text{彼が親切ではないのでしょうか} \\ S_{r_2} \end{array} \right) \text{とあなたに尋ねます。} \right\}$$

実際の発話においては、おおよそ、「私は John が親切だと思うのですが、そう（親切）ではないのですか。」「ぼくは、John が親切だと思うのだけれど、違う?。」のようになるのであろう。また、主文 (S_{r_1}) に否定辞が入っている場合には、「私は John が親切ではないと思うのですが、親切ですか。」のようになるように思われる。ここで筆者が強調したいのは、付加疑問文は、経験的にもきわめて自然な意味的基盤に基づいているということである。

3. 付加命令疑問文

3.1 付加命令疑問文の意味構造

次に聴者指向性のきわめて強いと思われる命令文、並びに、命令文に付加された tag 形式について考察してみたい。以下の例文を見られたい。

(32) Fetch me a book, will you?

(33) Put the light out, won't you?

(34) Don't speak to her, will you?

(35)
$$\text{Come in, } \left\{ \begin{array}{l} \text{will you?} \\ \text{won't you?} \\ \text{could you?} \\ \text{couldn't you?} \end{array} \right.$$

(36) Let's go, shall we?

ここで興味深い事実は、

(37) (i) 'will you?' と 'won't you?' という2つの形式の tag が現われていること、と

(ii) (i)以外に 'could you?' 'shall we?' などの tag が現われていること

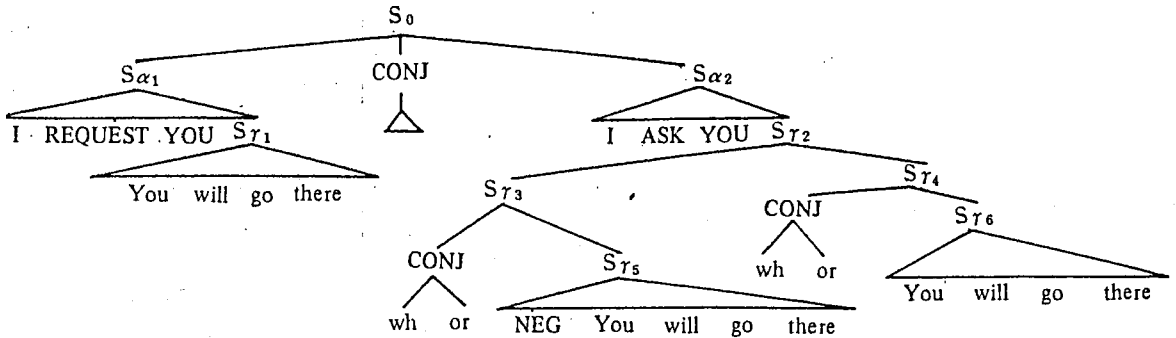
である。

命令文の深層構造に関して、Katz and Postal (1964) や Bolinger (1967) などに議論が展開されているが、筆者は、ここでは、命令文の深層には 'you' と 'will' があるという立場をとり、付加命令疑問文の will は tag formation から派生してきたと考えてみたい。すると (38) の意味構造は (39) のようになるであろう。

(38)

Go there, { will you?
won't you?

(39)



意味構造 (39) から一見して明らかなことは、'will you?' と 'won't you?' となる tag が基底に存在しているということである。また、例文 (38) は、概略、Tag Formation 変形により、 S_{α_2} と S_{r_3} から 'won't you?' が、あるいは、 S_{α_2} と S_{r_4} から 'will you?' が派生し、Performative Deletion により、 S_{α_1} と S_{α_2} が消去され、命令文変形で、 S_{r_1} の 'you will' が削除されて派生してきていると考えておく。ただし、ここで問題になることは、(37 i) で言及したように、'won't you?' と 'will you?' の恣意的な現れ方であり、付加疑問文の場合とは違う点である。

3.2 'will you?' と 'won't you?' の意味的差異

Bolinger (1967), Huddleston (1970), 石橋他編 (1966) などに、'will you' を付加した場合と 'won't you' を付加した場合の意味的な差異に関して種々の議論がある。これらは、全く差異を認めない立場と、わずかではあるが差異を認める立場 (具体的には、『否定形は肯定形 (will you?) よりもややくだけた遠く婉曲の感じを伴った表現』石橋他編 1966 p. 1041) に分かれるが、本稿の主旨とは直接関係しないため詳説は避けることにする⁶⁾。いずれにせよ、主文が肯定の命令文の場合には、恣意的に両者のうちのいずれかが選ばれるとしておきたい。

一方、例文 (35) に will 以外の助動詞が現われていることに関して、本稿では、pragmatic rules で処理されるとした方が妥当であるように思われる。それらはかなり場面的な要素を含み、語的な意味を考慮して tag が形成されており、VP deletion により派生してきていると考えられるからである。また、例文 (36) において let's は「誘いかけ」という「発話 (内) の力 (illocutionary force)」をもっているが、tag が shall we? になることについては次のようなことが考えられる。① tag は統語構造から機械的に派生されず、let's と shall we は深い意味的な相関関係にある。たとえば Shall we go on a picnic? の答えは Yes, let's. であること。②英語助動

詞の発達過程の中で 'Shan't we~?' は許されない。このようなことから 'Let's~, shall we?' 構文の場合も pragmatic rules で処理されるように思われる。しかしながら、この事に関してはまだまだ多くの問題が残されているように思われ、今後の研究の成果に俟ちたい。

3.3 主文と tag の統語的特徴

これまでの議論に加えて、付加疑問文と 'Let's~, shall we?' 構文を、主文と tag の統語的特徴についてまとめてみたい。下表 (40) は、否定辞が主文にあれば tag にはなく、逆に、tag に否定辞があれば主文にないものをプラスで示し、主文も tag も否定辞をもたないものをマイナスで示したものである。

(40)

TYPE	INVERSION
Yes-No Declarative type	+
Positive Imp. type	+ -
Negative Imp. type	+
"Let's" type	-

4. 英語教育との関連について

4.1 付加疑問文についての調査から

これまで議論してきたことと、英語教育との関連について考察を進めてみたい。以下に示すのは、1977年に中学3年生75名、高校1・2年生96名、合計171名を対象に行なった付加疑問文のテスト問題と正答率である⁷⁾。

(41) 1. You are going to buy the book, _____?

2. Mary lives in London now, _____?

3. Ken has gone to Tokyo, _____?

4. I think it is Tom's watch, _____?

5. Ken hopes Mother has cleaned the room, _____?

6. Hanako knows Jiro is happy, _____?

7. I don't think my father went to school, _____?

8. I hope it will be fine tomorrow, _____?

9. Ken doesn't think he wants to help her, _____?

問題	正答	正答率
1.	aren't you	87.7%
2.	doesn't she	67.7
3.	hasn't he	63.8
9.	does he	58.3
4.	isn't it	46.6
5.	doesn't he	33.5
6.	doesn't she	27.3
8.	won't it	20.5
7.	did he	1.2

また、解答をさらに詳しく検討した結果は次のようであった。

(42) (i) 単文から付加疑問文をつくる場合の正答率は、複文の場合と比べて高かった。

(ii) 問4で 'isn't it' と正解していながら問7, 8で 'don't I' と誤答している者が26名いた。

(iii) 問4から問9において、全て主節から (問4ならば、'I think')、付加疑問文を

つくっている者が19名いた。従って、問5, 6, 9の正答者もその中に含まれている。

(iv) 問4から問9において、全て従節から(問4ならば、'it is Tom's watch')、付加疑問文をつくっている者が12名いた。従って、問4, 7, 8の正答者もその中に含まれていることになる。

(v) 問9の正答率が58.3%と高いが、この理由として考えられることは、主節から付加疑問文をつくった場合には does he になり、従節からつくった場合には doesn't he となるためであろう。以前、実施した付加疑問文のテスト Father said Mother went shopping, ___? の場合の正答率も46.8%でかなり高かった。

(vi) 問7の正答率が1.2%ときわめて低かった。誤答例をあげれば、don't I が58名、didn't he 8名、doesn't he 5名、無答者 22名であった。

これらの点を考慮するならば、生徒は付加疑問文のもつ意味構造を理解しているとは思われない。つまり、object として名詞節を持つ複文の場合に、主節と従節のどちらを疑問化すればよいのか生徒は迷っているように思われるのである。この問題の解決にこれまで議論してきたことが一助と成り得ないものであろうか。

4.2 意味的原理の指導について

付加疑問文とは、話し手が思うある命題内容に関して自信がないため、聞き手にその真偽を問うために用いられるものであることは既に述べてきた。しかし、次の2文、

(43) (i) Tom is handsome, isn't he?

(ii) Bill supposes his girl friend will marry him, doesn't he? (Bill=him)

に共通しているものを発見できる学習者は何人いるだろうか。もしいるなら、その学習者は真に付加疑問文を理解していると言ってよいであろう(42 i)では Tom is handsome (4: ii)では Bill supposes... と思っているのは、話し手(ego)である私なのだということをおさえておきたい。このかくされた構造(深層構造)を提示され、驚き、喜ぶ学習者の中には、言語の神秘性に気づく者は少なからずいるはずである。

ひとたび理解をしたならば、あとは練習量の問題に移される。深い理解が定着、転移、応用に結びつくことは論を俟たないし、理解の伴わない練習は学習者にとって苦痛の連続にすぎないのである。

5. おわりに

本稿で明らかにしたことは次のとおりである。

- ① 付加疑問形成には種々のタイプがあり、それらには意味的な基底構造が存在しており、一貫した意味的な原理によって支配されているのではないかという観察。
- ② 文の表現構造として、話し手・聞き手の行為を示す performative, 話し手と命題との関係を示す epistemic, そして命題内容... という階層が存在すること。
- ③ 命令文に付加された tag (付加命令疑問文)には、そのきわめて不可思議な特徴として、

命令し、かつ相手の意志を問うといった複雑な意味構造を持っていること。また、相手の意志を問うことによって politeness が表わされ、won't you? と will you? には若干のニュアンスの違いがみられるのではないかという観察。

- ④ 付加疑問文の指導には、統語面のみならず、言語理論に基盤をおいた意味的な面からのアプローチが必要であること。

英語教育は決して暗記の体系のみであってはならず、今後も言語学の成果で役立つものは取り入れてますます充実していかななくてはならない。しかしながら、学習というものは「よくわかる」ということが先決であり、どんなに正しい理論であっても、中学校や高校の教室にそれを持ち込むことは有害でしかない場合もある。

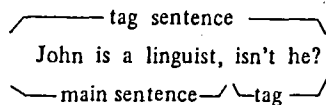
筆者は、本稿で議論してきたことを付加疑問文の指導法の一部として第1時間目から提示すべきであると言っているのではない。少しずつ学習者が理解の段階を高めた上で、教師が適切だと思う時に教師自身によってよく咀嚼された言語理論を提示し、定着を助けることが大切ではないかと主張したいわけである。学習者が何か一つでも理解したときのあの笑顔は、我々自身の喜びでもあるはずである。

注

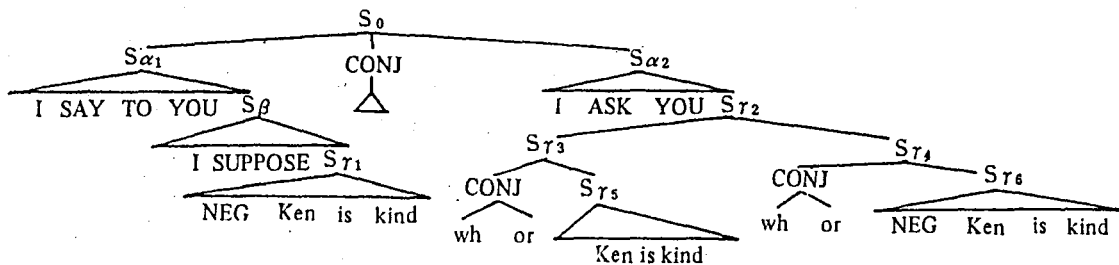
- 1) 本稿は1976年11月の大阪外大言語学研究会、1977年10月の中国地区英語教育学会（広島大学）での口頭発表に加筆訂正を施したものである。原稿に目を通され貴重な批判・助言をしていただいた静岡大学講師・澤田治美氏、福井県立丹生高等学校・稲光彦氏、枕崎市立枕崎中学校・深町 勉 氏、同志社大学の山中恵美子氏に対して心から感謝したい。

本稿の不備は、しかしながら、すべて筆者の責任であることは言うまでもないことである。

- 2) Huddleston (1970) は、主文と主文でない部分との区別をコンマに求め、コンマから左の部分 *main clause*、右の部分を *tag* と呼び、両者は *parataxis* の関係にあるとしている。本稿での付加疑問文 (*tag question*) という術語は、*tag sentence* と同じものと見なされており、単独に用いられている *tag* とは区別される。



- 3) Jespersen (1940: 481) もこの種類のものを付加疑問文とは見なさず、疑問の意味を強めるために前文の「主語 + (助) 動詞」を繰り返したものとみなしている。
- 4) Performative Deletion とは performative sentence (その文を発すること自体がある行為の執行になるという特徴をもっている文) を消去する *performative deletion* である (Ross 1970 参照)。
- 5) 主文に否定辞を含む Ken isn't kind, is he? の場合には、その意味構造を次の様に仮定できるであろう。



- 6) 広島修道大学・和田辨教授（個人談話）は、特定の「場」（たとえば、親しい者同志の会話）は例外として、その他の場合、命題内容とその命題内容を否定したものを聴者に与えるわけであるから、聴者は Yes か No かの選択を許されているために、won't you? の方がよりにくいになるのであろうと示唆された。また、静岡大学・澤田治美講師（個人談話）は、特に相手への依頼の場合、相手の意志を否定して尋ねること（すなわち 'won't you?'）は相手の 'refusal' を先取りしたことになり、それが politeness につながるのであろうと助言された。これについては筆者も同意見であるが、この問題に関する詳細な議論は別の機会にゆずりたい。
- 7) 同一の生徒を対象に種々の付加疑問文のテストを実施した中で、本稿に関係のある問題を載せてあるが、今回の調査は予備的なものであり、再度調査し、詳しい結果報告を、全国英語教育学会第4回沖縄大会で発表予定である。また、広島大学・垣田直己教授（個人談話）は、付加疑問文は、疑問文、否定文、代名詞化などの学習項目も十分把握されていなければ正答できないことも十分配慮しなければならないであろう、と助言された。

参考文献

- Arbini, R. 1969. "Tag-questions and Tag-imperatives in English," *JL*, 5, 205-214.
- Bolinger, D. 1967. "The Imperative in English," in *To Honor Roman Jakobson*, The Hague: Mouton.
- Cattell, R. 1973. "Negative Transportation and Tag Questions," *Language*, vol. 49, No. 3, 612-639.
- Downes, W. 1977. "The Imperative and Pragmatics," *JL*, 13, 77-97.
- Huddleston, R. 1970. "Two approaches to the analysis of tags," *JL*, 6, 215-222.
- 稲村松雄他編. 1970. 『中学校指導法事典(言語材料編)』 開隆堂.
- Inoue, Y. (ed.) (井上義昌編) 1966. *A Comprehensive Dictionary of English Grammar*. Kaitakusha
- Ishibashi, K. et al. (eds.) (石橋幸太郎他編) 1966. *A Dictionary of English Usage*. Taishukan.
- Jespersen, O. 1927. *The Philosophy of Grammar*. New York: W.W. Norton & Company, Inc.
- . 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen and Unwin.
- . 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. vol. 4. London: George Allen and Unwin.
- Katz, J. J. and P. M. Postal. 1964. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press.
- Lakoff, R. 1969. "A Syntactic Argument for Negative Transportation," in Binnik, et al. (eds.) *Papers from the fifth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, Chicago Linguistic Society. Chicago, Ill.: Dept. of Linguistics, Univ. of Chicago, 140-147.
- Langendoen, D. T. 1970. *Essentials of English Grammar*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Otsuka, T. (ed.) (大塚高信編) 1970. *Sanseido's Dictionary of English Grammar* (2nd edition). Sanseido.
- Ross, J. K. 1970. "On Declarative Sentences," *Readings in Transformational Grammar*, Waltham, Mass.: Ginn and Company.
- 澤田治美. 1976. 「文の表現性の文法的・意味的制約(1)(2)」 『英語青年』 (4/5月号), 研究社.
- Schmering, S. F. 1975. "Imperative Subject Deletion and Some Related Matters," *Linguistic Inquiry*, vol. 6, No. 3.
- Smackey, T. R. and R. Beym. 1969. "Tag Questions—Dangerous Psycholinguistic Territory for TESOL," *IRAL*, vol. 7, No. 2, 107-115.
- 鈴木英一. 1972. 「付加疑問文に関する一考察」 『英語学』 7, 開拓社.